

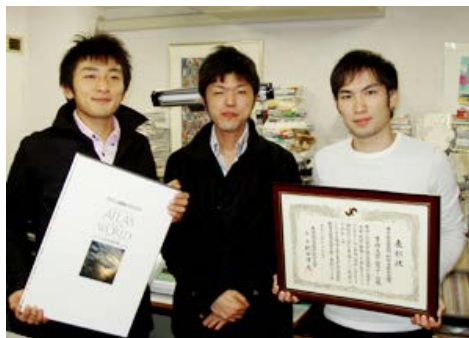
商学部渡辺ゼミ

商学部渡辺ゼミの3人「四谷の活性化」提案が入賞

世代を超えて集う街に 地域と人々が双方向交流を

商学部・渡辺ゼミ(渡辺達朗教授指導)のメンバー3人が、東京・新宿区四谷の地域活性化を考える「大学・地域の協働による学生まちづくりプレゼンテーション大会イン四谷」(東京商工会議所、四谷地区商店会連合共催)に参加。「地域と人々との双方向交流」を提案し、参加7大学10チーム中、最高賞に次ぐ東京商工会議所新宿支部会長賞を受賞した。「4年間の集大成になった」と言う3人に話を聞いた。

3人は鷲陽一郎さん、西島章夫さん、小野沢雅之さんと共に4年次生。



▲左から小野沢さん、鷲さん、西島さん

渡辺教授の「まずは足を使え」というアドバイスから、昼夜問わず区域(JR四谷駅西側から新宿駅方向の四谷1~4丁目)を歩き、店舗300店を回って住民の目線で実地調査した。その結果、知名度に比べ大きな特徴はないものの▽さまざまな世代が集う▽個人経営の店舗や飲食店のほか住居が多く、古い住宅街がある▽寺社が多く文化的な雰囲気がある——などの新たな要素を発見。隠れた町の姿を引き出して新しい魅力を作り出すことで、人々が集まるまちづくりを考えた。

そこで編み出したのが、地域と住民・来訪者が双方向で情報を送受することが出来る情報のプラットフォーム「四谷の術(すべ)て」。老・壮・青そろった世代の多様さを考慮し、ソーシャルネットワーキングサービスを活用したウェブやモバイル、ブログの構築と共に、地図やパンフレットなども使って町を視覚的に再確認できるようなシステム作りを提案した。

加えて路上でのベンチの設置やトイレの開放、寺社の空きスペースを有効活用したカフェや「寺子屋」の営業を提案。つながりを深め、集いやすい町にするための工夫も打ち出した。

3人は以前、他企画で「横浜みなとみらい」地区のまちづくり提案で落選した苦い経験から「中途半端に終わらせた調査や提案はやめよう」と、夏期休暇を返上して打ち込んだ。

発表では「コンテンツの濃さとともに、実現可能な提案が評価されたと思う」(鷲さん)と、確かな手ごたえを感じたと言う。また、「チームワークが良かった。協力してくれた2、3年次生に刺激を与えられたのでは」(小野沢さん)、「貴重な経験と共に『結果』が得られた。こういった企画や発表の場があったら、積極的に参加することを勧めたい」(西島さん)と後輩への激励も忘れない。

バレーボールのアナリスト目指して

夢の実現に向けチャレンジ中 — 行武広貴さん(商3)

商学部会計学科3年次の行武広貴さんが、先月行われた世界バレーボール選手権に出場したブラジル女子チームと全日本女子チームとの強化合宿に帯同通訳兼随員として参加した。

父親の仕事の関係で中1の夏から3年間米国で過ごした。帰国生が多く学ぶ東京都・国際高校卒業後、渡米前に部活でやっていたバレーボールに携わりたいと、ボランティアで同校女子バレー部のコーチに。1年次の時、体育の授業で担当だった佐竹弘靖ネットワーク情報学部教授に「バレーのコーチをしているので、もっと詳しく知りたいのですが」と相談すると、「それなら適任者がいる」と元全日本女子チームコーチの吉田清司法学部教授を紹介された。

同じころ、「ニュース専修」で「アナリスト」として活躍する渡辺啓太さんの記事を読み、興味をもった。吉田教授から渡辺さんを紹介してもらい、「英語」を生かして日本バレーボール協会での通訳としての活動が始まる。

「今回はブラジルチームの2度目の帯同だったので、前回の反省点を改善し、練習がうまく進むように一歩先を行く段取りを考えました。ナショナルチームがどう戦っているのかが分かり、とても勉強になりました。通訳としての力を高めようと田邊祐司文学部教授にも教えを請うた。

今夏のワールドグランプリでは香港とマカオで、あこがれの「日の丸」のジャージを来て、アナリストとして活動。「将来の夢」を見つけ、「目標は語学力のあるアナリスト」と話す行武さんのチャレンジに12月9日、「育友会奨励賞」が贈られた。

ウクライナで ボランティア活動

人のつながりは言葉を超えて— 佐藤泰裕さん (商3)

「英語は苦手。でもありきたりのパック旅行はしたくない」。商学部会計学科3年次の佐藤泰裕さんは、今夏、国際教育協議会の国際ボランティアプロジェクトに参加。旧ソ連のウクライナで多様な国籍の人々と建物整備の奉仕活動を2週間行った。

キャンパス内のポスターを見て同プロジェクトに申し込んだ佐藤さん。これが初めての渡航だった。同国については「民主化へのオレンジ革命が起きた国」くらいの知識しかなかった。しかもグループ内の会話は英語が基本。不安はあったが「迷うより実行。問題があったらその場で考えよう」と度胸を据えて出発した。

イスタンブール乗り換えで首都キエフまでの空路はまったくの個人旅行。その後、キエフから100キロ離れた村でのボランティア活動では、最初はイタリア、フランス、スペインなど約20人の仲間が何をしゃべっているか、さっぱり分からない。

しかし、彼らと寝食を共にすることで会話にも慣れ、現地の孤児院で大勢の聴衆を前に日本文化を伝えるプレゼンテーションを英語で行った。ウクライナの子供たちと一緒にサッカーを楽しみ、持参したお面や提灯をせがまれたそうだ。

「『言葉』は大事。しかし、人と人とは言語を超えてつながる」—海外で交流する楽しさを知った。次回の参加も考えている。「この次も日本人がいなくていいですね」。



▲ボランティア仲間と(左端が佐藤さん)

育友会奨励賞

3個人・4団体が受賞

さまざまな分野での成果、創造的活動が認められた学生を表彰する第7回(平成18年度)育友会奨励賞の表彰式が12月9日、神田キャンパスで行われた。

今年度は18組の応募があり、本部常任役員会で選考の結果、3個人、4団体が選ばれ、小川恵三会長から表彰状と賞金が手渡された。

★受賞者★

▽山田大輔さん(経済3)＝「夢と絆」

▽中村圭太さん(法4)＝総合格闘技環太平洋王者奪取

▽行武広貴さん(商3)＝「バレーボールと世界」

▽体育会ローラースケート部＝第47回全日本学生ローラースケート選手権大会優勝への軌跡—女子スピード部門準優勝・ホッケー部門優勝・総合優勝—

▽男子ラクロス愛好会＝ラクロスを通じた学生生活と二部復帰への改革

▽入学センター学生スタッフ＝入学センター学生スタッフ活動報告

▽体育会漕艇部＝日本選手権優勝までの道のり



▲賞状を胸に喜びの受賞者(前列右・小川会長、左は庄菊博育友会主任)

経営学部・地域と大学を結ぶセミナー

「もっと、LOVEマック！」高校生対象に初の企画

アイデアコンテスト

経営学部の「地域と大学を結ぶセミナー」では、ビジネスに関するさまざまなテーマを取り上げてきた。29回目となる今年には日本マクドナルド(株)の全面協力により高校生を対象に、集客に向けたアイデアコンテスト「もっと、LOVEマック！」を11月23日、生田キャンパスで開催した。

廣石忠司学部長が、「地域の高校生と大学を結びつける場として初めての企画。授業では学べない『経営』というものを体験する場にしてほしい」とコンテストの開催趣旨を述べ、同社の人事部・日比谷勉氏は、「メニュー開発、マーケティング、経営戦略などのセクションからアドバイザーを参加させますので、会社のさまざまな側面を知る機会にしてください」とあいさつした。人材育成に力を入れている同社では、中学校での職業教育の実践はあるが、高校生を対象としたものは初めてとのこと。

「高校生が行きたくなるようなメニュー、お店を考える」

高校生たちはグループに分かれ、馬場杉夫ゼミ、新井範子ゼミの学生がチューターとして、また、コンテストにも他のゼミの学生とともにオブザーバー参加した。初対面の高校生たちは緊張した面持ちだったが、チーム名を全員で考え、同社提供のランチを食べてからは笑い声があふれ、積極的にアイデアを出し合っていた。

プレゼンテーションの結果、大学賞の金賞には、メニューへの学割制度導入と時間帯による座席変更を提案した「もっとマックに行き隊」が選ばれ、同社からも特製のクッションが贈られた。元気なプレゼンを披露した常盤さんは、「オープンキャンパスでこの企画を知り、すぐに申し込みました。人前で話すのが好きなので楽しかったです。大学生の発表は、モノの見方が深く、勉強になりました」と「経営」への興味を深めた様子だった。